

FUJICA ST605 の 比的マニュアル

はじめての人編

1st Edition

「かたづけものをしていたら、出てきた。」

「お父さん、おじいさん、または、おじさんからもらった。」

「友人が使わないといってくれた。」

見ると、FUJICA と書いてある。カメラだということはわかるが、「FUJICA」とはなんだ？

「ずしりと重いし、高いカメラに違いない」と思ったかもしれません。

「FUJICA」は、富士写真工業のカメラの略、「Fuji の Camera」の略で、以前カメラのブランドとしていたものです。

FUJICA ST605 というカメラは、1976 年 7 月発売で、発売当時は一眼レフとしては廉価版として販売されたため、現在では、プレミア価格には決してなることはありません。「お宝」にはなりませんので、期待しないようにしましょう。

それで、この ST605 について、カメラは初心者だけれど、どうにか動作するのかを確認したいと思ったら、カメラ屋さんか、昔から写真を撮っている信頼できる方に見てもらったほうが良いと思います。

リスク覚悟で、自分で動かしたい、チェックしたい、その上で、現在のデジタルカメラにはない面白さを予感した場合は、良く理解した上で使ってください。その上で、フィルムカメラを楽しむのは、たいへん結構なことです。

なお、このマニュアルは、ほんとに信じてよいのか、第三者の保証はありませんので、あくまでもリスク覚悟で読んでください。なにが発生しても、保証できません。しかも動作させようとするのは 30 年ほど昔のカメラなので、予想できる動作にならないことだってあるかもしれません。

確実に使いたいなら、古いカメラの修理業者がたくさんありますので、そちらに修理依頼して、取り扱い説明書は、Canon から、リプリント版を購入してください。修理は程度にもよりますが、遮光のモルト交換 5,000 円から、部品交換が必要な場合は、部品代含んで 20,000 円以上かかることもあります。

このカメラは、オールマニュアルです。

すべてを手動で設定します。フィルムカメラをはじめて手にする人や、「写ルンです」しか使用したこの無い方は、慣れるまで、勉強と訓練が必要であることを認識ください。

まず読んでね

「やらないほうが良いよ」という行為について

ST605 は機械式カメラです。電池が無くても、動作することは動作します。まともな写真が撮れるかは別問題ですが。

しかし、わかっているつもりで、いきなりフィルム巻き上げのレバーを動かして、リリースボタン(「シャッターボタン」とも呼びます)を押してしまうと、動作しないかもしれませんし、壊すことがあるかもしれません。いちばん危険なのは、スローシャッターに設定してあることに気がつかず、巻き上げ動作をして、シャッターほ切って、シャッターが閉じないうちに、また強引に巻き上げようとして、ちからまかせにして、壊してしまうことです。

そして、ずっと、動作させていないので、硬くなっているから、力を入れれば動くということは、考えないほうが無難です。もちろん、さびやグリスの硬化で、硬くなっている場合はありますが、初心者がちからまかせにして、良いことはありません。セルフタイマーなどは、グリスが硬くなって、動作しないこともあると思います。

偶然にも、シャッターが動作したとして、内部のミラーのショック防止のモルト(黒いスポンジ、正確には「モルトプレーン」という)が、経年変化で、べたべたになっていて、ミラーが戻らずに貼り付くということがあります。とにかく、みさかい無く、いじりまわすのは、壊すもとです。

「絶対やってはいけない」という行為について

カメラとしての常識も含まれますが

- たたいたり、落としたりの強いショックを与えない カメラの操作には、ちからまかせはいけません
- 水に弱いので、水没、水洗いは、致命傷になります。雨が直接当たる使用ももちろんいけません。
- 溶剤を使用する拭き取りは、溶剤によりいためる原因になります
- 慣れない人が拭いてはいけない部分があります。 注 1

注 1 慣れない人が拭いては、いけないところ。

「手に入れたカメラがほこりと汚れだらけなので、キュッキュッと、きれいに、すみずみまで拭きました」という話を聞いたことがあります。ご愁傷様ですが、カメラを壊したと同じです。

カメラの撮影レンズは、初心者が、手もちの布、ティッシュ、めがね拭きで拭くと、傷がついたり、コーティングがはがれます。めがねはハードコートなので、比較的材質としては強いのですが、カメラのレンズは、光学ガラスにソフトコートなので、すぐに傷がついたり、コートはがれが起きます。専用のクリーニング用品を使い、やり方を熟知しないと、破壊になります。専用のレンズ

クリーニングペーパー、無水エタノールか、エーテルなどの溶剤を準備して、拭きかたをネットで検索してから行ってください。

ご健闘を祈ります。

それからレンズを外した右の図の状態の内部は触らないほうが無難です。ミラーは、表面鏡のため傷につきやすく、初心者が拭き取ると、キズが残ります。その上にある、白く見える、すりガラス状の、「スクリーン」は、プラスチックで作られていて傷につきやすく、汚れがついている場合、初心者が触ることは、破壊することと同じです。

カメラ屋さんに行って、ブロワーという、ゴミを



吹き飛ばす、ゴム製の用具を買ってきてください。それで、ゴミを吹き飛ばしましょう。1000 円以内で買えるはずで
す。スプレー式のもの、初心者はやめておきましょう。



Fig.1

A. : マウント

レンズ取り付け部分。この状態で、レンズを取り外した状態です。撮影にはレンズが必要です。使用可能なレンズは、M42 スクリューのマウント用レンズとなります。Pentax の M42 レンズ等、多種のレンズが使用可能です。

B. : シンクロ接点

ホットシューに接続できない、スピードライト(ストロボやフラッシュなどと呼ばれます)などをケーブル接続する場合に使います。X 接点のスピードライトのみ接続可能です。

C: 吊り下げ金具

ネックストラップなどのストラップ類を取り付けます。

D: 露出ボタン

このカメラには電源スイッチがありません。このボタンを押すと電源が入り、絞りが動作して、絞込み測光の動作となり、絞りとシャッター速度をファインダー内の指標に手動であわせます。

E: セルフタイマー

セルフタイマーを動作させるレバー。セルフタイマーを使うには、巻き上げレバーで、いちど巻き上げた状態で、このセルフタイマーレバーを前から見て、反時計回りにまわします。最大約 150 度ほどまわります。その状態で、レバーの陰の、ボディーについている、銀色の小さいボタンを押すと、スタートします。「ジー」と機械的な音が十数秒して、シャッターが切れます。レバーは元の位置にもどります。



Fig.2

F.: 巻き戻しノブ

フィルム巻き戻しのときに、クランクを引き出して回します。うら蓋を開く場合は、引っ張ります。

G: ホットシュー

アクセサリースューと呼ぶ場合があります。スピードライト(フラッシュと呼ぶ場合もある)を取り付けた時の接点があります。前面のシンクロ接点と同じくX接点となります。

H: シャッター速度ダイヤル 兼 フィルム感度設定ダイヤル

まわして、シャッター速度を設定します。フィルム感度を設定するときは、ダイヤルを持ち上げて回します。

ASAというのは、ISO 感度と同じ単位ですので、ISO400 のフィルムは、ASA400 にあわせませす。

J: レリースボタン

シャッターボタンとも呼ぶボタン。押し込むと、シャッターが動作します。ボタン中央にネジが切つてありますので、汎用(むかしの)レリーズケーブルを接続することができます。

K: 巻き上げレバー

フィルムを巻き上げて、シャッターチャージをするレバーです。一度巻き上げて、シャッター動作させていないと、次の巻き上げができません。無理に二度巻き上げると壊れます。二重露出は、可能ですが、それについては、記載省略しておきます。十分な訓練が必要です。

L: フィルムカウンター窓

フィルムが何枚目か表示します。裏フタを開くと、自動で S(スタート)に戻ります。

M: 絞りリング

絞りを設定するリングと、数字は絞り値。

N: 被写界深度指標

絞り値に対する被写界深度の目安の指標。

P: ピントリング

ピントを合わせるためのリング。

Q: 距離指標

ピントを目測で合わせたり、確認するための指標の数字。緑の数字がフィートで白の数字がメートル。

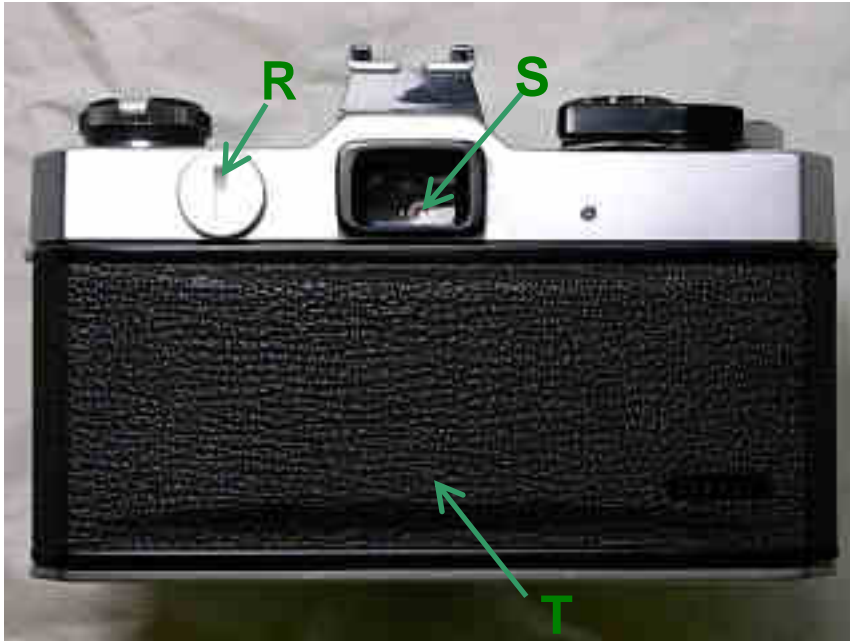


Fig.3

R: 電池室

電池室のフタです。使用する電池は、LR44(アルカリ)か SR44(酸化銀)を2個使用します。コインなどでまわして、開け閉めします。

S: アイピース

構図決定、ピント合わせ、露出計指標確認で使用します。のぞいて使います。

T: うらフタ

フィルム室のフタです。巻き戻しノブを引き上げると開きます。撮影途中で開くと光が入り撮影したフィルムが感光して、写した写真がだめになります。



Fig.4

U：巻き戻しボタン

フィルム巻き戻しの際、このボタンを押して、巻き戻しクランクを回します。

V：三脚穴

三脚などに取り付けるときのネジ穴です。



Fig.5

W：ロック溝

レンズ取り付けの位置決めロックの溝です。ST605では、使用しません。

X：絞りピン

レンズの絞り値を動作させるピンです。絞り動作のため、本体から押されると、絞りが動作します。曲げないように注意が必要です。

Y：開放F値設定ピン

レンズの開放F値ピントを本体に設定させるピンです。ST605では使用しません。

なお、この各部の呼び名は、正式な取り説と異なるものがあります。

電池について

使用する電池は、LR44(アルカリボタン電池)や SR44(酸化銀電池)が2個です。

カメラ店、コンビニ、100 円ショップでも購入可能です。電池が無くて、フィルム巻き上げ、シャッター動作はしますので、露出あわせ以外は動作します。単体露出計か、デジタルカメラを露出計かわりにすると、電池なしでも、使用可能です。



Fig.6



Fig.7

コインなどでまわしてあけます



Fig.8

あけた状態



Fig.9

LR44 を 2 個入れた状態 手前側が+(プラス)

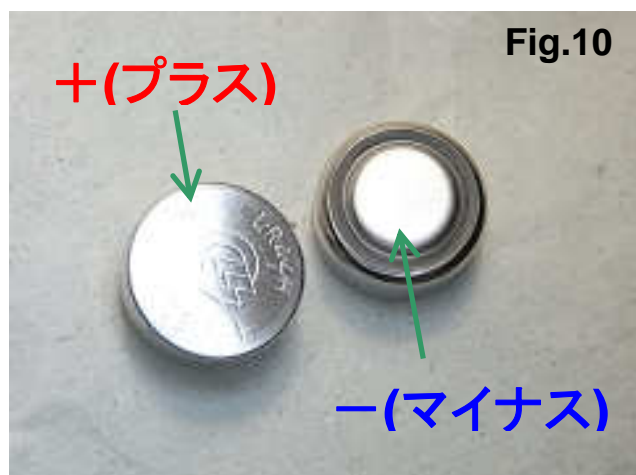


Fig.10

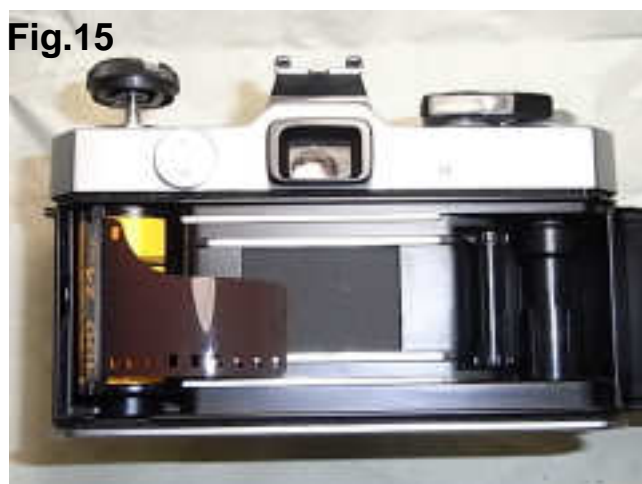
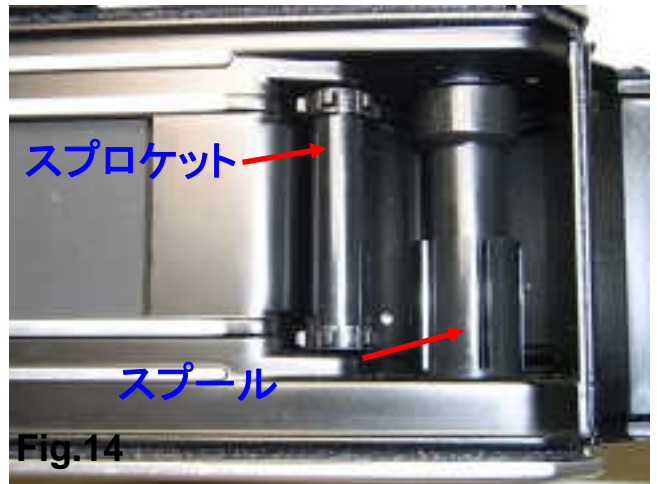
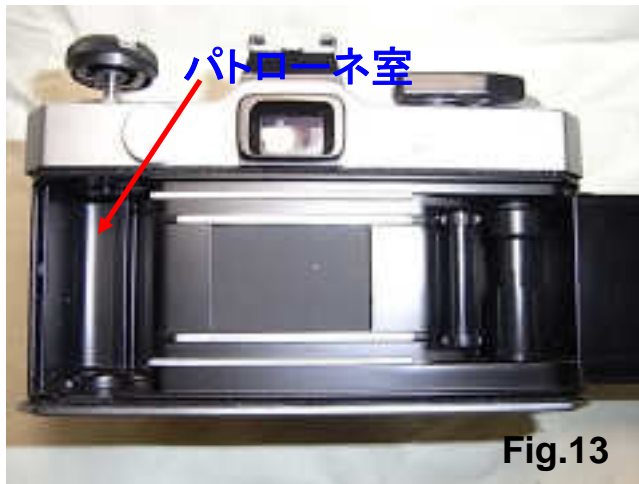
+(プラス)

-(マイナス)

LR44 のプラスとマイナスに注意

フィルムの入れ方

裏蓋を開けるには、巻き戻しノブを引き上げる。図では軽くつまんでいる状態ですが、力が必要です。開けたら、絶対にシャッター幕には触らないこと。軽く押したくらいで、壊れることがあります。



(1) 巻き戻しノブが上に上がっている状態でフィルムのケース(パトローネと言います)を入れます。あわてものは、フィルムを逆さにして「入らないよ」と、慌てます。そのあとに、巻き戻しノブを下げます。ノブを少し回さないと、位置としてうまく入らないことがあります。

(2) フィルムを引き出しながら、巻き取りスプールのスリットにフィルムの先を差込みます。フィルムの上下の穴(パーフォレーションと言います)のうち、最低1つまで差込みます。

あたりまえですが、フィルムをずるずると引き出しすぎたら、使い物になりません。

(3) フィルムの上下の穴(パーフォレーションと言います)にスプロケットの歯(突起)がちゃんと噛みこんでいる状態で、巻き上げレバーを少しずつ巻き上げで行きます。スプールはスプロケットと逆の回転をしますので注意してください。フィルムの端が図のように見えてくるまで巻き上げたほうが、確実です。



(4) フィルムの上下がちゃんとガイドにあっている事を確認してから。フタを締めます



(5) ふたを閉めてから巻き戻しノブを軽く回して、フィルムのたるみをとります。巻きすぎると、スプールからフィルムの端が外れますので、あくまでも軽くです。この状態ではすぐに撮影できませんので、巻き上げて、カラシャッターを切ることを2回行くと、撮影できる状態となります。

フィルム感度合わせ

フィルムの ISO 感度を設定します

一般に売られている、カラーネガフィルムは、ISO 感度が 100 か 400 のものがほとんどですが、それ以外のものもありますので、確認と、設定が必要です。

シャッター設定ダイヤルを持ち上げると、ISO 設定を変えることができます。ISO 感度は、「ASA」書かれた(ASA はフィルム感度の昔の表記です)窓に表示されます。20 から 3200 の数字を見ることができます。ダイヤルの B から 700 まで書いてあるのはシャッター速度です。

ISO100 のフィルムは、100 に、ISO400 のフィルムは 400 にあわせませす。数字がない「-」の部分は下記になります

目盛り	ISO 感度	目盛り	ISO 感度
25	25	-	320
-	32	400	400
-	40	-	500
50	50	-	640
-	64	800	800
-	80	-	1000
100	100	-	1250
-	125	1600	1600
-	160	-	2000
200	200	-	2500
-	250	3200	3200

撮影

露出合わせ

アイピースからファインダーをのぞくと

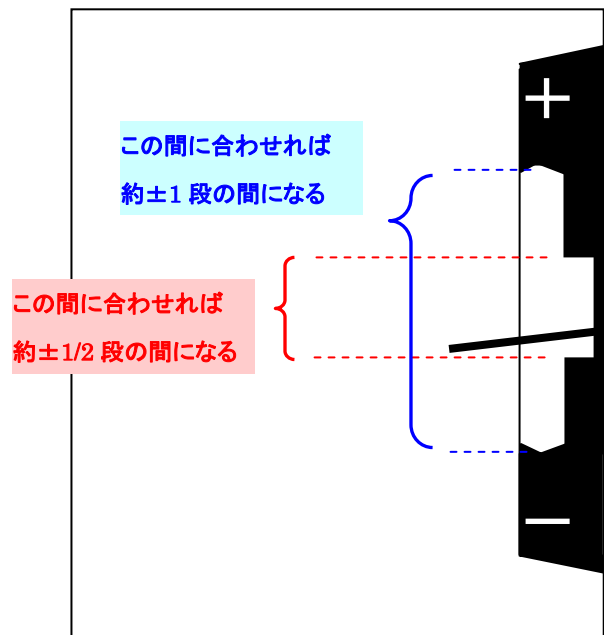
右側に Fig.20 のメーターを見ることができます。

写したいものを見ながら、Fig.1 の D:露出ボタンを押し込んだときに、このメーターの針が + (プラス) と - (マイナス) の間で、水平になるようにシャッター速度と絞りの値を調整します。

この ST605 は「絞込み測光」と言って、露出を合わせる場合、つまり「露出ボタン」を押し込むと絞りが動作して、画面が暗くなりますがそれは、故障ではなく、実際に写す場合と同じ絞りまで動作させて、光が入る量を測定していますので画面が暗くなります。

露出ボタンを押して、露出を決定する場合まわりが明るいときは、アイピースから光が入り込むと、誤差が出ますので、アイピースに目を押し付けて、できるだけ、隙間が少ないようにします。

Fig.20



シャッタースピード

Fig.21 はシャッタースピード 1/700 秒 Fig.22 は、シャッタースピード 1/60 で、赤い文字は、X 接点、つまりスピードライト(エレクトリックフラッシュともいう)を使用する場合のシンクロ速度ですので、スピードライト使用時は、かならず 1/60 に合わせます。このダイヤルの数字が大きいほどシャッタースピードは速く、小さいほど、シャッタースピードは遅くなります。手ブレを少なくするには、数字を大きく、する必要があります。暗いところでの撮影は、ブレ防止に三脚に取り付けて、数字の小さな、遅いシャッタースピードを使用することになります。



Fig.21



Fig.22

シャッタースピードの「B」というのは、「バルブ」と言って、レリーズボタンを押している間、シャッターが開き続ける設定です。夜空の星の撮影などで、長時間、シャッターを開き続ける撮影などに使用します。



Fig.23

絞り

絞りというのは、人間の目では「ひとみ」のあたるもので、大きくしたり、小さくしたりして、光の入る量を調整します。絞りの設定は、レンズについている。「絞り設定リング」で行います



Fig.24

この 55mm F2.2 のレンズの場合は、絞りは、2.2 から 16 の間で設定できます。絞りは、数値が小さいと、大きく開き、たくさんの光が入り、数値が大きいと、小さく開き、少ない光が入るため。明るい場合は、数値を大きく設定して、暗い場合は、数値を小さく設定します。

絞りによって、「被写界深度」が変わります(後述)

露出合わせは、この内蔵の露出計使用以外に、単体露出計を使用したり、シャッタースピードと絞り値を表示することができるデジタルカメラを露出計代わりに使用する方法もありますので、とくにこの方法で必ず使用しなくてはならないということではありませんし、古いカメラの場合、内蔵露出計が経年変化でズレていることがありますので、一度撮影してみて、ネガの状態を確認する必要があります。

ピント合わせ

ST605 は、オートフォーカス機能がありませんので、きちんとピンとあわせを手動で、いちいち行わないと、ピントがあった写真は撮れません。



ここを回して、ピントを合わせます

Fig.25

ピント合わせは（距離あわせは）

ST605 のアイピースから、ファインダーをのぞくとスクリーンは、右のように、マット面の中央に、マイクロプリズムとスプリットの二重になった構造になっています。

ピントは、マット面とマイクロプリズム部では、像がくっきりと見える状態が、ピントが合っています。スプリット部は、上下の像がずれていれば、ピントズレで、上下で合っていれば、ピントが合っています。

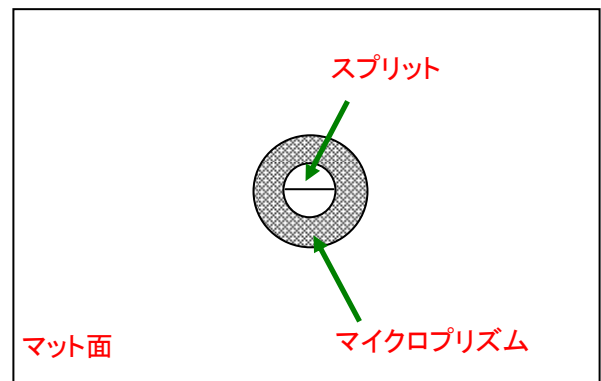


Fig.26

被写界深度

絞りを絞る、つまり設定値を大きくするほど、ピントのセンターから前後までくっきりと写すことができます。

逆に、絞り値を小さくすると、ピントの合っているところの、前と後ろはボケた像になります。

そのことを利用すると、絞りの値を小さくして、写そうとする(たとえば)人にだけピントを合わせて、背景の風景をぼんやりとぼかした写真を撮ることができます。

Fig.25 では、距離目盛の下にある縦線で、センター位置から、赤い線は絞り4、緑の線は絞り8というようにくっきりと写る範囲を示しています。

赤点は、赤外フィルム使用時のピントあわせのセンター位置ですが、詳しくはネットなどで確認ください。

撮影終了と巻き戻し

24 枚撮りフィルムを入れると、フィルムカウンターが 24 になるか、24 を過ぎたあたりで、巻き上げても巻きあがらなくなります。力をいれて思いっきり巻き上げると、フィルムが切れる場合がありますので、ちからまかせはいけません。

フィルムが終わると、巻き戻しですが、底面の (Fig.4 の Q) 巻き戻しボタンを押して(押しながら)、巻き戻しクランクを矢印方向に回します。24 枚撮りは、24 回転程度、36 枚撮りは、30 回程度で巻き戻せます。くるくる巻き戻して、カクンと急に軽くなったときが巻き終わりです。パトローネにフィルムを巻き込んでおく場合は、そのまま何回転がくるくる回せば、フィルムは巻き込まれます。カクンと軽くなってすぐに、巻き戻しをやめれば、フィルムの先がパトローネから出た状態となります。自分で現像するなら、フィルムの先が出た状態で終わりましょう。

蓋を開けてフィルムを取り出すと、フィルムカウンターは、リセットされてもとに戻ります。

「ほんとに、写真が撮れているのか、途中でフタを開けて、フィルムを見てみよう」という、笑い話のようなことを実際にやっちゃったという、フィルムカメラのことをまったく知らない人も、現在ではいるようです。巻き戻さずに、ふたを開けると、光が入って、撮影済みの画像はだめになります。まちがってあけてしまって、あっと思って、すぐに閉めると、数コマは犠牲になりますが、その前の部分で、巻き取られていて、フィルム自体で光がさえぎられて、救えるコマもありますので、現像してみてもいいでしょう。失敗は成功の元です。

レンズ交換

ST605 は純正の FUJICA の ST605 用レンズが使用可能です。

レンズ交換は、レンズ自体がネジとなっていますので、ネジと同じく、レンズ自体を反時計回りにまわせばはずれて、時計回りにまわせばレンズを取り付けることができます。レンズ交換の機には、レンズの前後や、レンズ取り付け部、つまりマウントと呼ばれる部分の内部に触れないように、ゴミも入らないように注意が必要です。

FUJICA 用以外のレンズで、「M42」という規格のレンズであれば、ほとんど使用可能です。自己責任で使用してください。たとえば、Pentax 用の M42 マウントのレンズや、サードパーティー製や海外のレンズも使用可能です。

ただし、よく情報を得てから使いましょう。

M42 規格以外の、富士写真工業の FUJI ブランドのレンズは使用できないと考えてください。

このカメラは、35mm フィルムを使っていますので、焦点距離が 50mm ぐらいが、標準レンズと呼ばれるもので、それより、数字が大きくなる、たとえば 200mm という焦点距離だと、望遠レンズで、数字が小さくなる、たとえば、28mm という焦点距離だと、広角レンズとなります。

M42 マウントのズームレンズは、少ないので、探すと、単焦点レンズとなります。しかも中古を探すことになるので、Pentax の古いレンズや、ほかの会社製の M42 マウントレンズを探すことになります。望遠レンズなら、135mm や 200mm レンズが、見つかる可能性が高いでしょう。広角レンズは、28mm や 35mm レンズが見つかりやすいでしょう。旧東ドイツ製や旧ソ連製のレンズを探し出して、使うのも、おもしろいかもしれません。

さて、ST605 を使う気になりましたか。

いままで、フィルムカメラを使っていない方ほとんど、使う気にならないでしょう。

持っていてもしようがないと思ったら、さっさと売りましょう。

レンズにはカビがはえていませんか。

レンズを明るいところにかざすか、懐中電灯の光をあてて、くもの巣のような白くて細かいもやもやがあったら、それは、レンズにはえるカビです。このカビは、拭いてもカビ痕が残り、コーティングを侵すので、新品同様には決して戻りません。もし幸い、カビが生えていなければ、はやめに手放したほうが良いかもしれませんよ。もしカビがはえたらレンズとしては、ジャンクですから。

おとうさんや、おじいさんの愛用のカメラだったというようなばあいで、使ってみたいと思ったら、そのまま使い続けてください。昔の機械式カメラは、けっこう丈夫です。定期的に使っていけば、なかなか壊れないと思います。使わないときは、たんすや押し入れにしまわないで、風通しの良いところに、むきだしで放置するのが、カビがはえない最良の方法です。ストラップを壁のフックに引っ掛けて、ぶらさげておくだけで、十分に良い環境といえます。

ご健闘ください

2013/03/23